



TITLE:

静脩 Vol. 20 No. 1 (1983.10) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 20 No. 1 (1983.10) [全文]. 静脩 1983, 20(1)

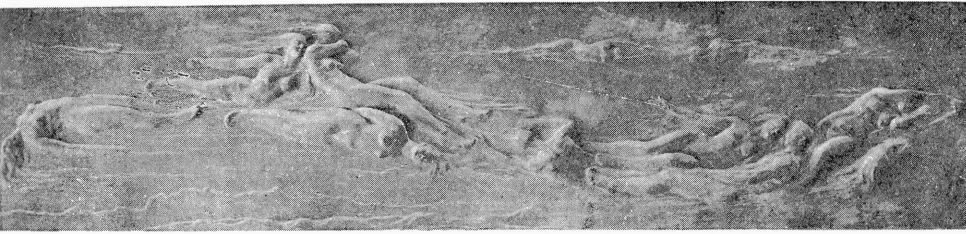
ISSUE DATE:

1983-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65978>

RIGHT:



静脩

1983年10月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 20, No. 1

新 営 図 書 館 に 望 む

教養部教授 上 横 手 雅 敬

いよいよ10月末には新図書館が竣工し、来年4月には開館の運びになるという。目録・閲覧貸付・書庫などが学内各所に散在していた不便な状態が解消するだけでなく、種々の新設備を具えた新図書館が始動するのはよろこばしいことであり、そのすぐれた機能に寄せる期待は大きい。開館を前に、新営図書館の運営について、若干の希望などを申し述べたい。

昭和25年に京都大学に入学して以来、旧図書館には大いに親しみ、多くの恩恵を蒙ってきた。全学総合目録などで検索し、自分で書庫に入って書物を持ち出し、閲覧貸付掛で借用手続を済ませ、研究室や自宅で読むというのが、私の図書館利用法であった。新図書館では、このすべての部分、目録も書庫も貸付も、従来とは面目を一新する。入学以来34年目に訪れた図書館新営は、ささやかな私の研究生生活にも重大な影響を及ぼしそうである。別に私事を大袈裟に言っているのではない。私のような形で図書館を利用されている方は少ないし、また目録・書庫・貸付などは、図書館のもっとも基本的な部分なのだから、ごく狭い経験から来る私の感慨にも公共性がないとは思わない

のである。

しかし商議会のメンバーとして、種々の会議に参加している中に、痛切に感じたのは、図書館の利用法が極めて多様だということであった。大きくいって文科系と理科系とはまったく違っているし、図書館に対して抱く期待やイメージは、人ごとに様ではないのである。出席した会議でとりあげられた話題のかなりの部分が、私には不十分にしか理解できなかったのは、図書館機能の多様性によるのである。図書館は私たちが考えてきたように決して本を借りて読むだけのところではなかったし、本を借りて読む仕方にしても様々なのである。

一例として図書貸出の期間、冊数だけを取りあげても、2年・300冊を限度とする学部もあれば、1週間・3冊以内とする学部もある。これらの規則の違いは、それぞれの学問のあり方から来ていることは疑いないが、附属図書館の方は、1週間から2年、3冊から300冊におよぶ全学のバラエティの中で、何か一つの規則を作らねばならないのである。多様な要求に応じて、多様に対応しなければならないのだから、私にわかりにく

い部分があるのも当然であろう。また多様な要求に対応することは、どの要求にも不十分にしか対応できない結果を生ずる恐れも少なくないのである。

新図書館に設けられる諸施設も、多様な要求に応えてのものであろう。しかし新施設は結構だが、目録・書庫・出納などの基本的部分が、どの程度改善されているのかといえ、開館された上で利用して見なければ何ともいえないように思う。例えば収蔵量の増大のため集密書庫を用いる必要はよくわかるが、それによって図書の検索がやや不便になるといった程度のことは、やはり甘受しなければならないようである。

多様な要求に応えることはむづかしい。ただ1週間から2年までの平均値や最頻値を出すだけで解決したなどとは考えてほしくない。数や統計の安直な利用には心しなければならない。

新図書館の利用には、事前に十分な準備がなされており、関係者の御努力は多ししなければならない。しかし、どれほど周到に準備が行なわれても、所詮新図書館は管理・運営にあたる側でも、利用者の側でもはじめての経験であり、思いもよ

らぬ不備・不便が生ずることは当然予想される。それはやむを得ないことであるが、その場合、不備をすみやかに改善する柔軟さを求めたい。大学のような大きな組織では、成文化された規程だけでなく、慣行すら容易に改められない傾向がしばしば見られる。新図書館の場合、前例や慣行は存在しないのであり、試行錯誤を重ねてそれらを作っていくのだという姿勢が必要であろう。

最後に図書館がどんなにすぐれた施設を持っても、それが周知させられ、利用の仕方が平易に指示されなければ宝の持ち腐れである。ブックディテクション・システムだのA.V.ブースだの始めて耳にする人も少なくなろう。機械に弱いのに、年をとってから機械につき合わされる身をかこつ文科系中高年教員の一人として、新施設利用法の平明な解説を望みたい。

未知のものへは期待とともに不安も大きい。開館とともに不安が氷解すればまことにありがた。旧図書館のもってきた牧歌的な人間臭さへの愛着はなお捨てがたいが、所詮それらは失われていくものであろう。ただ機械では扱いきれない部分に、血の通った運営を希望する。

—— 資料紹介 —— ①

外国図書(大型コレクション)について

昭和57年度外国図書(大型コレクション)購入費により下記の資料を購入し、附属図書館に蔵置しておりますので御利用下さいませよう御案内いたします。

なお、この資料について経済学部平井俊彦先生に詳しい解説を執筆していただきましたので、御利用の手引きとして紹介いたします。

ゴールドスミス=クレス文庫 —経済関係初期文献集—

経済学部教授 平 井 俊 彦

昭和57年度に、ゴールドスミス=クレス 経済学文庫 Goldsmith's=Kress Library of Economic Literature のうち第1部, Segment I (15世紀から1800年までに出版された文献)のマイクロ・フィルムが、本学中央図書館に所蔵されることとな

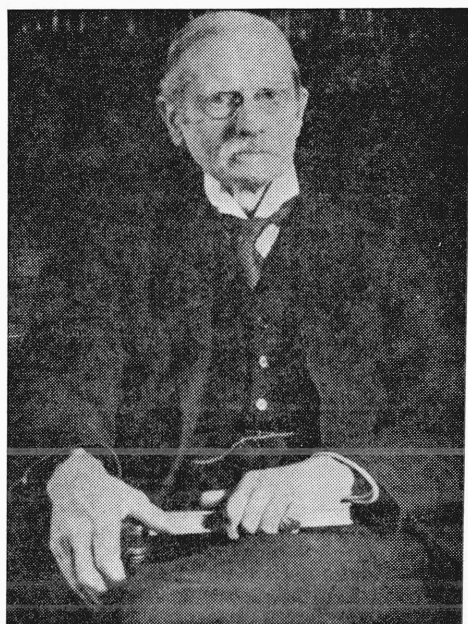
った。第1部に収録された文献点数は、補遺4,000点を含めて約31,000点にのぼる。リール数にして2,028。ちなみに第2部 Segment II (1801-50年に出版された文献) 約29,000点で、1,700リールにのぼる、当該文献に関する世界で最大規模の文

庫である。

収録されている分野は、経済学および経済に係る資料が主要であるが、社会学、政治学、地誌学などきわめて広い領域をおおっている。また、経済そのものについてみても、農業、漁業、鉱山業、土地測量をはじめ、人口、商業、各種の手工業や技術から、航海、海賊、密輸などをふくむ貿易、植民問題、さらには铸貨、古銭、十分の一税をふくむ金融・財政問題、鉄道・海運・運送方法など経済活動に関するあらゆる分野が、網羅されている。のみならず、この文庫は、社会状態や社会制度、たとえば債権・債務関係、刑事学、都市問題、犯罪や労働関係、企業型態、社会主義、各国民の気質、あるいは奴隷制、ギルド、国防、地方行政などさまざまな方面に及んでおり、単に経済学関係のみならず、政治学、行政学、法制史、社会事情など社会科学全体にかかわる、きわめて広く学際的な性格を備えているといつてよい。

すでに、経済学関係の古典的な文庫といえば、経済学部図書室にはドイツの経済学者の蔵書、ビューヒャー文庫(11,466冊)とマイヤー文庫(約26,000冊)をはじめ、上野文庫(約26,000冊)や、河上文庫、財部文庫などがある。実物ではないが、ゴールドスミス=クレス文庫が中央図書館に所蔵されることによって、既存の文庫とあわせ、莫大な経済学関係の初期文献集がみられることになった。この規模は、メンガー文庫やフランクリン文庫などを所蔵する一橋大学に優に比肩するものといえよう。経済学関係の古典文献センターとして、本学の占める役割はきわめて大きくなったといえる。

ところで、この「ゴールドスミス=クレス文庫」は、ロンドン大学の「ゴールドスミス文庫」The Goldsmith' Library of Economic Literature at the University of London と、ハーバード大学の「クレス文庫」The Kress Library of Business and Economics at the Harvard Graduate School of Business and Business Administration in Boston とをまとめたものである。いま、私の手許にある両者のカタログについてみ



H. S. フォクスウェルの肖像

ても、それぞれのカタログが、ケムブリッジとニューヨークで別個に出版されているが、新たに1976年から今日まで、まとめられて Goldsmith'=Kress Library of Economic Literatureとして、ウッドブリッジで4巻まで出版されている。これら二つの文庫は、J. M. ケインズがコロンビア大学のセリグマン・コレクションとともに「世界の三大コレクション」と呼んだものである。三上隆三教授は『経済学事始』(東洋経済新報社、昭57年)のなかで、一橋大学のメンガー文庫を加え、これらを「経済学4大コレクション」と述べている。これらのなかでも、メンガー文庫の約2万点、セリグマン文庫の約3万点などと較べて、本文庫はその数倍にも のぼる 最大規模のものである。

これら二つのライブラリーは、主としてイギリスの経済学者フォクスウェル Herbert Somerton Foxwell (1849-1936) が、ほぼ60年の長きにわたって蒐集した文献が中心となっている。フォクスウェルは1874年にはじめてケムブリッジ大学で講師をつとめ、1877-85年にマーシャルの不在の間にその代講をおこなっている。その間、1881年

にはロンドンの University Collge の経済学教授になり、1907年には、キャナン Edwin Cannan とともにロンドン大学の経済学教授に任命されている。かれの専門は経済学の一般理論と通貨・銀行論であった。ところで、かれの学風はといえば、先輩であり友人でもあったW.S.ジェボンズとは異なり、きわめて歴史的であり、社会的であった。このことは、彼の有名な論文「イギリスにおける経済学の動向」1887年にみとめられる。かれはこの論文で、経済学はリカードやミルの後継者たちの論じるように抽象的な法則的・普遍的科学ではなくて、制度や支配形態の発展の研究であって、それらが各国民や各時代の経済意識を規定していることを解明するものだ、と主張している。こうした歴史や制度への強い関心が、文献蒐集への意欲を促したのかもしれない。

フォクスウェルが、どのようにして、これほどまでに大規模な文献蒐集をおこなったかは、『経済学文献、ゴールドスミス文庫目録』 Catalogue of the Goldsmith' Library of Economic Literature, Cambridge, 1970 の序文に詳しい。また、三上教授の前掲のエッセイも、その消息を伝えていて興味深い。いま、これらによって、いくつかのエピソードを綴ってみよう。

ケインズが「H.S.フォクスウェル」1936年に書いた記事によれば、1850年を下限として文庫作りを始めたのは、フォクスウェル自身の関心によっていたようである。ところで、フォクスウェルは集書の出版時期として一おう1848年を目安としていた。その後の出版物は、48年以前に関係のある歴史的資料に限られた。フォクスウェルは、その理由を、一つには1848年はJ.S.ミルの『経済学原理』の出版された年であり、二つにはヨーロッパ各地で革命がおこった年だからだ、とつねに述べていたようである。ケインズはこの話に加えて、その翌49年がフォクスウェル自身と現代が生れた年だと、注意をひいている。彼が生れる年以前に出版された文献にのみ関心をもとうとした」と。フォクスウェル自身は、この文庫を「イギリスの産業、商業、貨幣、財政の歴史研究、ならびに経済理論の一般的な発展の研究の基礎として役

立てる」ために蒐集した、と書いている。

ケインズが本文庫の下限を1848年としたのに、実際は1850年となっているのは、どういうわけだろうか。フォクスウェルが初めてコレクション作りにのりだしたのは、1875年ジェボンズのすすめでロンドンのある古本屋から、Larder の Railway Economy, 1850. を購入したときからであった。このとき以来、フォクスウェルは限られた時間と給料を割いて、精力的に本を集めた。フォクスウェルは休日のもとより、昼食の時間や講義時間の合間をぬって、古本屋を訪ねた、かれは電話を用いず、たえず電報用紙と青鉛筆を持ち歩き、ミラノへ出講したときにも、古本屋めぐりをした、集書の虫であった。こうして、25年間に、約3万冊の書物を集めた。1901年に、この蔵書をWorshipful Company of Goldsmith が1万ポンドで買い上げ、これをロンドン大学へ寄贈した。その後もゴールドスミス会社はこの文庫を整理し維持するために資金を提供しつづけ、今日まで「ゴールドスミス文庫」は、ほぼ4万点を数える。

「クレス文庫」のほうはといえば、フォクスウェルがゴールドスミス文庫を売却するとき、重複した書物を4,000冊ほど除いておいたのを、1929年にハーバード大学へ売却した。それと、1913年にフォクスウェルが先の文庫の整理から解放されて、第2回目のコレクションをおこなった成果である。これらは、総計36,000部に上るが、C.W. Kress がその資金を提供したので、この文庫は「クレス文庫」と呼ばれている。今回、これら二つの文庫が重複を省いて、「ゴールドスミス=クレス文庫」のカタログができつつある。ねがわくば、近い日に第2部も収めて、文庫全体の閲覧と利用に供したいものである。



谷 村 文 庫

本文庫の寄贈者谷村一太郎氏は、藤本ビルブローカー銀行取締役会長などを歴任した実業家であり、また、明治・大正・昭和の三代を通じて菟書家として有名であった。

同氏は明治4年(1871)に富山県福光町の素封家に生れ、父友吉氏は地方有数の名望家で代々祖谷屋と云い、絹布の商いと殖産工業に力を尽したが、遺憾ながら家業は衰退に向った。一太郎氏は十三才にして家を相続し、発奮努力、東京に出て慶応義塾大学に入学したが、のちに早稲田大学に転じ同校を卒業した。帰郷してのち中越鉄道支配人となり、泉州紡績株式会社支配人を経て、明治39年藤本ビルブローカー証券会社に入社した。そのかわり湊鉄道株式会社社長、日本活動写真株式会社取締役、帝国人造絹糸監査役などを兼ね、所謂帝人騒動を巧みに乗り切り危機を脱した。

昭和7年健康を害したが、静養すること1年、漸く回復した。以後諸会社の重職を悉く辞して晴耕雨読を友とし、昭和11年(1936)3月13日京都中京区堺町通竹屋町の自宅で66才の多彩な生涯を閉じられた。

氏は実業界にあっては鋭才を駆使して華々しく活躍したが、その反面書窓の閑寂を愛し、秋村と号し(明治新聞界の先覚者、藤田茂吉氏が名付けた)、また別に石山(滋賀県石山寺の風景を愛したことから)、そのほか故郷の名山の名から二上太郎、東嶽隠士、匡王山人などのペンネームを持っていた。また、学究としての一面もあり、京都大学の教授達とも終始往来があつて、特に新村出博士とは度々書物探訪の旅行をした。

氏は晩年に郷土の学者、芸術家などの遺業を顕彰することに力を尽し、『中嶋棕隠と越中』昭和7年金沢書香会刊(中嶋棕隠は幕末の儒家、越中へ行って墨客と雅遊した)を著わし、また『校註老松堂日本行録』昭和8年東京大洋社刊(老松堂は明の宋希璟の号で、永楽18年明使となって来朝

し、足利義持に面謁した凡そ10か月間の紀行文)をも著した。さらに氏はその専門である経済、財政、金融においては、経済学者海保青陵(宝暦5年~文化14年)が金沢を根拠として加越の間を遍遊し講演をしたので、今も同地方の商業道徳が保たれているのを顕彰するため『青陵遺稿集』昭和10年東京国本出版社刊『青陵陰陽談』昭和10年高岡、野村書店刊『まびき』昭和10年金沢、宇都宮書店刊(氏が金沢の北国新聞に大正12年以来投稿したもので時事、経済、財政等の諸論を抜萃したもの)の如き経済学の専門的著述があることを見ても一介の事業家でなかったことが窺われる。

実業界を退いてからは、京都在住の書物愛好者十数人が毎月第一月曜日に集って何かと研究する「月曜会」の会員になった。此の会は学徒のみの寄合であつて、同氏以外には実業家は加わっていなかった。会員中には新村出、藤堂祐範、鈴鹿三七など本館ゆかりの人々も居られたようである。同氏は典籍収集に際しては、和漢の古典籍に特別な関心を寄せ、珍籍稀書の入手の為には大金を投じてでも惜しまなかったといわれている。

次のような逸話がある。昭和9年、書誌学者禿氏祐祥氏は東京の某が天文版の『難経俗解』を手離してもよいとの事を聞き大阪毎日の重役、高木利太氏に推薦した所、五山版には興味がないから暫く預って置くと話した事を谷村氏が伝え聞き、是非共入手したいと現品は尚落手しないのに代金200円を早速送り届けて入手された。若いサラリーマンの月給が20円位の当時の話である。

また、本館所蔵に帰した谷村文庫の中核をなす、猪苗代家連歌書類を入手した昭和5年6月の事、京大図書館嘱託鈴鹿三七氏の許に谷村氏が来て、近頃京都の某書肆に連歌の書物が一括して売りに出されていると人から聞いたので買おうと思うが、一度見てほしいと言ったので鈴鹿氏はお供した。当の連歌書類は、高さ二尺五寸、幅二尺程

の桐本箱に詰込んであった。蓋書は「仙台侯書東類 猪苗代」と墨書してあった。

これは仙台侯の愛顧を受けた猪苗代家の襲蔵のもので、他に類例をみない体系的な連歌の集書であった。その散逸するのを憂いて購入されたのが本館所蔵の猪苗代本である。以上の挿話は「秋村翁追懷録」（昭和12年金沢県立図書館刊）による。

なお、猪苗代家は兼載（文明2年～永正7年）を家祖とし、兼純より明治初年の兼道に至るまで代々連歌師をもって伊達家に勤仕した仙台藩の名家である。

猪苗代家本の中でも近衛信尹（天文14年～慶長19年）筆の『何木連歌』『何何連歌』、文明9年の飛鳥井栄雅（応永24年～延徳2年）筆の『連歌初学抄』等はことに特筆すべき連歌の逸品である。猪苗代兼載自筆『和歌活套』と『園塵』・猪苗代兼郁自筆『家業相統之記』、また、伊達藩主の消息、懷紙、伝授等大部分は徳川期の写本である。総計1705冊で300余年の風雪を凌いでよく保存されている。

猪苗代本以外に本文庫には、奈良朝写経生、占部忍男が写経料紙の下附を申請した神亀五年の解『申請筆事』、天平12年の東大寺施入の光明皇后の願経をはじめとする、奈良写経など。平安朝のものでは伝桓武天皇宸筆の写経、神護寺の紺紙金泥の装飾経などの写経。鎌倉写経では建保6年の大学頭藤原孝範の願文、室町時代では享禄3年版の『聚分韻略』、天文5年版の『八十一難経』等の稀観書が多数収蔵されている。

そのほか春日版、高野版、慶長・元和の古活字版等の各種の版式があり、特に五山版は豊富で、氏はこの方面の収集家として有名であった。応永11年刊の『仏祖正法伝』、貞和4年刊の『景德伝灯録』は何れも五山版であるが、宣和6年の『法苑珠林』、紹興18年刊の『経律異祖』等、宋版の内典類は十数巻収蔵され、『太平御覧』、『明修本尚書註疏』、『明修本礼記正義』等稀少な宋版の外典も収集されている。また『勅修百文清規』等の元版、『欒城集』等の明版の嘉靖20年刊行の古活字版もある。

なお、明時代の稀書として『永樂大典』を挙げ

なくてはならない。本書は巻12929～12930、1冊の零本であるが、箱書に徳富蘇峰がこの巻が明の高宗皇帝の部に属し、大典中の圧巻であると書いている。また、一説によると、この零本は中国の碩学、王国維が日本に携帯して来たもので、好事家の間で話が出来、内藤湖南博士や、富岡謙蔵氏等へ、渡された数部の内であろうとの事である。

（零本とは全巻でなく一部分のこと）

本文庫が附属図書館に寄贈されるようになった経緯についてふれておく。一太郎氏の遺子に四男あり、何れも翁の性格気風を受け継ぎ、各界に名を成していたが、氏の歿後兄弟相寄り蒐集された書物を将来永遠に保蔵し、その整理の上は死蔵せず、広く学者の為に公開することに合議一決し、長男順蔵氏の夫人の父君である元館長、新村出博士の進言を容れて昭和17年、愛蔵書9200余冊全部を本学附属図書館に寄贈されたのであった。

なお、本文庫の各冊毎に一太郎氏の雅号、秋村に因み「秋邨遺愛」の朱印を捺印して故人の遺徳と芳志を永久に記念している。又この文庫に対する利用が多く、文庫の総目録の刊行が久しく期待されながら徒らに時を過していたが、順蔵氏及び次男敬介氏より所要経費につき御協力を得ることになり、本館の職員が目録編纂し、昭和38年『京都大学谷村文庫目録』（235P. 書名索引付）を刊行することができた。

近年和漢書目録掛全員で、文庫中の貴重書を詳細整理する機会を得、目のあたりに宋版、古活字版等を展げて比較する事が出来たのは、新刊書ばかりで古書に接する事の少なくなった現在、多くの善本を蔵する本館に仕事を持つ者の喜びであり、一同谷村氏の遺徳への感謝の念をあらたにしたことであった。

（附属図書館 笹本光代）

舎 密 局 ～ 三 高 資 料 に つ い て

—教養部図書館史の点描として—

大阪英語学校時代の明治8年2月2日に最初の閲覧規則として「書籍拝借心得」（教養部報123号参照）が誕生し、同9年12月9日には「書籍縦覧場」（同上参照）が設置されて、図書館としての体裁が整い始めたのであるが、「書籍拝借心得」が当時としても不十分な規定であったために、明治10年1月27日に「大阪英語学校書籍規則」の成立となった。この規則に起案文があつて珍らしいと思われるのでその全文を紹介しよう。「凡ソ海外ノ国語ヲ学ハント欲スルヤ海外ノ書籍ヲ要ス英語学校ノ如キハ其書籍ヲ速ク英米ノ二国ニ取ルガ故ニ供給ノ乏シキ価格ノ貴キ自カラ学徒ヲシテ閲覧ノ便ヲ失ハシム因ニ今般左ノ通り校籍貸与及月賦払下ノ規則ヲ定正施行候ニ付各自能ク之ヲ認体遵守スベシ」（諸伺記綴甲明治10年）とあつて、その「校籍貸与規則」の第2条には「生徒の日課用書籍ハ自辨勿論ナレトモ時宜ニ依リ校籍ヲ貸渡スコトモアルヘシ」となっている。日課用書籍とは今でいう教科書のことであつて、条件付ではあつてもこれを貸出すことができるとし、第4条では寄宿舎に入舎の者には課外の書籍を2部に限り貸出すこととした。このことは、一般通学生には認められていないことを意味し、また校員（教官をも含めて）も三冊の貸出しが認められていたけれども、それは研究室までであつて、自宅に持ち帰ることは禁じられていたようである。なお「書籍払下規則」の第1条には「教場必要ノ書籍一時払下難相願輩ヘハ十二ヶ月賦ヲ以テ払渡候事」となっていて、この頃は教科書の月賦販売業務まで図書館職員が担当していたのである。

明治13年3月4日には、始めて特別貸出の許可をした文書がある。「医学本科生近藤富之助外五名ヨリ解剖書壹部拝借之儀別紙之通願出候間右ハ特別ヲ以御許可相成乎」に対して朱書にて「願之趣特別ヲ以許可候事」とあるが、こののちこの種の特別貸出が多くなると共に、同年7月1日には「當夏季休業中校籍拝借願」が同様に特別許可と

なっている（雑事書類明治13年）。

明治12年4月に大阪専門学校と校名変更があつた翌年の6月9日には文部卿河野敏鎌代理文部少輔九鬼隆一より「自今其校所蔵ノ図書并ニ器械模型等毎学年末ノ調査ヲ以テ分類目録ヲ編纂シ或ハ便宜印行シ毎学年ノ始メ九十日已内ニ差出スヘキ事 但器械模型標品等ハ可成丈和洋両名ヲ記載スヘキ事」という文書がきて（文部省特別達書綴明治13年）、この時から手書の冊子目録又は印刷冊目録が作成されて毎年送付されることになったが、これは明治22年5月2日付にて、文部大臣子爵榎本武揚の「自今差出スニ及ハス」の達まで続くこととなる。

明治13年9月4日に制定された大阪専門学校事務分掌規定をもって、分掌規定の最初とされるものであるが、この当時には記録掛・会計掛・教場監事・器械掛・書籍（ショジャク）掛などがあつて、明治18年11月30日に改正されるまで書籍掛は、次のような規定となっている。

1. 書籍室規則ノ改正ノ意見ヲ稟申スル事

1. 當校ニ所蔵ノ図書ヲ管知保存スル事

1. 管知スル所ノ図書ヲ書籍室規則ニ因テ出納スル事

1. 書籍縦覧所ノ取締ヲナス事

1. 教科用及参考用ノ図書購買并ニ不用ノ図書売却ニ付意見ヲ稟申スル事

1. 毎年管知スル所ノ図書ノ出納及ヒ現数ノ統計表ヲ調整スル事

大阪専門学校が大阪中学と改称されたのが、明治13年12月11日であるけれども、この頃の蔵書数は和漢書が6516部で外国書が6916部、その他の地球儀及掛図等が110点となっている。一見したところ蔵書数が少いようであるが、この頃までに購入された図書特に教科用図書を中心にして、売却されるのが常であつた。それは例えば「左之通御蔵書中全ク有餘ニ付壹部金拾二銭二厘宛ニ而御払渡ニ相成度此段相伺候也」というような起案文を

度々目にすることができることから、それを知ることができるのであるが、一方では度々の校名変更による学科内容の改正から、不要となったものが当時の文部省会計局に預けられて、そこから東京図書館長の鈴木良輔宛に配置換となったような図書も多いのである（文部省達書類明治14年）。

明治14年11月24日には、これまで書籍掛は書籍室といって教場を改装した部屋を使用していたが、この日より第六番教師館を文庫と改称して、始めて独立の建物となり、機能が集中化されることになったのである（文部省伺届原稿明治14年）。このことを大阪中学校一覧は次のように報じている「閲覧場ハ之ヲ二区ニ分チ一ヲ特設閲覧室ト称シテ職員ノ閲覧所トナシ一ヲ普通閲覧室ト称シテ生徒ノ閲覧所トシ各成規ニ遵ヒテ図書ヲ閲覧スル事ヲ許ス。此閲覧場ノ開閉ハ執務ノ都合ニヨリ時々小変ナキ能ハスト雖モ大約日課始業前三十分時ニ開キ日課終業後三時間ヲ経テ閉ツルヲ例トス』と。

文部卿福岡孝弟宛に「規則制定之儀伺」が出され、明治15年4月8日に「伺之通」と決裁になった「図書室規則」が施行されることになって、始めて図書室の名が公式に使用されると共に、教員はもちろん生徒に対しても貸出が認められることになった点において画期的であるといえるだろう。（文部省伺届原稿明治15年）。また、旧職員及び卒業生に対しても閲覧の便が開かれることになったこの規則は、現在の閲覧規則と大差のないものとして見ることができるのではないだろうか。

明治16年2月には「大阪中学校文庫和漢図書目録」が印刷冊子目録として誕生し、また同年8月28日には、「従来當省直轄学校（中略）等へ図書

物品ノ類ヲ寄付候節ハ管轄庁ヲ經由シ来リ候処自今本人ノ便ニ依リテハ直ニ其学校館等へ申出ルモ不苦候条此旨告示候事 但寄付品ノ種類ト本人ノ請願ニ依リテハ其寄附ヲ受クベキ学校館等ヨリ運搬費ヲ支給スルコトアルヘシ」と文部卿福岡孝弟名で告示第1号が出されているのに注目する必要がある。

明治18年7月12日付をもって「其校儀自今其組織ヲ改メ大学分校ト称シ候」と文卿伯爵大木喬任より達があり、同年11月30日に「大学分校処務規程」が制定されて2課6係となり、教務課の中に教場係・寄宿係・器品係が包含され、会計課には会計係・庶務係が所属している。

この頃から大学分校の移転計画があったようであり、明治18年11月13日付で^{東成}郡長より地価あるいは松虫塚辺の細図に関する回答文があり、また絵敷地が3000坪で文庫の占める坪数が150坪の数を目にすることもできる（参考書類明治18年）。また翌年の2月2日朝日新聞が「大学分校の新校地」と題して、京都伏見桃山が見合せとなり、大阪東成郡天王寺村茶白山を敷地とする旨の記事があったりするが、19年4月29日に第三高等学校と改称されてのち、10月28日の大阪朝日新聞に大阪は教育に適地ではなく、京都に移転が内定した旨の記事があり、更に12月6日には文部省達達によって京都移転が決定されている。なお大阪朝日新聞は、葛野郡谷口村、等持院内に定められる筈のところ、愛宕郡吉田村旧名古屋藩邸の跡に定められた旨の記事を掲載しているが、このことについては「神陵史」に詳しいことである。

（元教養部図書室 古原雅夫）

京都大学附属図書館について

—『静脩』に寄せられた意見より—

『静脩』も創刊以来、20年になった。この間に寄稿された図書館についての要望や意見をそれぞれ一行ほどの文章におきかえ、類似のものをまとめ、分布と内容を調べてみた。『静脩』の創刊号（1964年9月発行）から現在（19巻1号、1982年4月発行）

までに、教官から学生にいたる多くの利用者から寄せられた要望や意見は、内容上82項目にわたっている。図書館の新館、機能の拡充によって、多くの要望に応えることができるようになったが、今後さらに努力目標とすべきことも数々ある。

静脩に寄せられた意見：82⇒100%

意義：4⇒4.9%

- 個人のCollと図書館（4）
- あっても図書館へ行く documentation systemの完備
 - 図書館の効用は専門書だけにあるのではない「無用の用」

システム：12⇒14.6%

<学外>

- 相互協力（2）
- 大学の外へも開かれた図書館
 - 図書館相互の連絡と開放家を離れたらためになる

<学内>

- 大学図書館の構想が不十分
- 中央図書館との連繫（5）
 - 附属図書館・教養部図書館の充実
- 北部図書館を（2）
 - 研究用図書と学習用図書の分離、学部図書室（室）は学習に（2）
- 部局図書館（室）と中央館の役割
- ライブラリーシステムと日常的な小さな実際の問題との結びつき解決
- 蔵書と職員との集中

職員：18⇒22.0%

- 有能な図書館員を（7）
- 図書館業務を生き生きと→研修、図書館員と研究者の協同関係の確立
 - Biblio National図書館は学会（図書館員）の育成所でもある
 - IRの仲介者としても
 - 古書のおかの人を
 - 本を知っている人を

- 業務の向上を（11）
- 夜間開館を（2）
 - 昼休み開館を
 - 整理を早く（5）
 - 目録が使えない
 - 雑誌目録の整理を
 - 多量の情報・資料の蓄積を資源として展開される科学を営むシステムの中でのシステムの創造運営

建物：17⇒20.7%

- 開架室（14）
- <雰囲気>
- 安らぎ→開架（2）
 - 知識欲をかきたてられ満たされる場
 - 静かに思索しながら本を読む重要性
 - 静謐の場
 - 雰囲気、勉学に打ち込んだアカデミックな雰囲気だけだった、家で勉強するより、その雰囲気にとけ込んでやっただ方が能率的である（4）
 - 親念的クラブ活動の場であった静けさと利用しやすさ、視野の機能分化

- <接架>
- 開架→設備がととのっている読書の場
 - 「本の間を歩きまわり」どんな本があるかを知り、どれを読むかを迷い、手にとって友達の意見を聞くのはどんなに楽しいだろう
 - 「本の顔を見る」ことの意義
 - 開架時間 静かに

- 書庫（2）
- たまるばかり
 - セントラル・スタックの良さ

- 目録（1）
- 本との出会いカードで

蔵書：31⇒37.8%

- <研究用>
- 検索内容の充実を（6）
- 二次巨大情報館に
 - IRオンライン文献検索を（4）
 - 物としての図書から情報としての図書へ
 - 蔵書の充実を（10）
 - 図書館内で計画的な収集を
 - 高価図書等「蔵書の穴」を作らない
 - 統計資料の学内共同利用
 - 利用効率の高い図書に
 - 日本および世界の文化のデータベースに
 - 図書館の階層別充実を（5）
 - 「小さな図書館」Working Coll.
 - 社会科学総合図書館を
 - 学部の学習用図書の充実
 - 蔵書集中を各図書館単位の専門集書とのバランス

- <学習用>
- 開架図書（6）
- 複本を（3）
 - 利用期間、冊数の増
 - 借出し
 - 図書の近づきにくさ
- 保存（9）
- 貴重書の集中保存（2）
 - 日本文化を伝える文庫は日1日と「亡んでいる」
 - シンクタンパー、資料（史料化）の集中保存（5）
 - 保存書庫、蔵書の分離

要望や意見は、次のように3つのグループに大別することができる。（図 参照）

1. 図書館の意義
2. 本学のライブラリーシステム
3. 図書館の基本的要素（人・建物・本）

各々のグループの個々の意見は、表をみていただくことにして概略的なものをみていくと次の通りである。

1. 図書館の意義

「（自分の蔵書に同じ本が）あっても図書館の本を使うことが多い。documentation systemの完備（したところ）」（吉川幸次郎先生他）、「図書館の効用は専門書だけにあるのではない、『無用の用』も大切である（小川環樹先生）の意見に代表されるように、個人の蔵書（書斎の本）と違って図書館には、計画的に収集、整理された資料とそれらを検索する手段が整っており、知識を拡げる世界であるということが出来る。

2. ライブラリーシステム

2-1. 学外

「大学の外へも開かれた図書館を」（教官）、「図書館相互の連絡と開放、京大を離れたら研究が困難になる」（院生）というように、学外からも利用しやすいような制度作りの要望が強い。

2-2 学内

「附属図書館や教養部図書館の充実」（院生）、「北部図書館構想」（教官）、「研究用図書と学習用図書を分離し、学部図書室は学習に」（一利用者）、「部局図書館と中央館の役割」（教官）、「中央図書館と部局図書館との連繫」（院生）、「ライブラリーシステムと日常的な小さな実際の問題との結びつき解決」（教官）、「蔵書と職員との集中」（教官）の意見があるが、システムとしての「大学図書館の構想が不十分」（院生）であるという意見に集約される。

3. 図書館の基本的要素

3-1. 職員

「有能な図書館員」（教官）と業務の向上に尽きるようである。「古書がわかる」（教官）ということから電算機と連動した「Information Retrieval（以下 IR）の仲介者」（教官）として、幅広い知識と高度な技量が求められている。また「夜間」（教官）や「昼休みの継続的なサービス」（学生）と「整理のスピードアップ」（教官）、「目録の整備」（院生）やささらには「多量の情報資料の蓄積を資源として展開される科学を営むシステムの中でのシステムの創造運営」（教官）といった情報化社会に機敏に対処し得る先見性をもった図書館運営が望まれている。また、「利用者と職員の協同関係の確立」（教官）の大切さも指摘されている。

3-2. 建物

図書館にとって最も基本的で大切なものとして、閲覧室の雰囲気と接架（書架に接する）に対する意見がある。これらは伝統と歴史に支えられ利用者自身によって創り出されたものであり、深みや味わいを感じさせるものが多い。以下意見を要約し、列記する。

《雰囲気》

- ・ 安らぎ
知識欲をかきたてられ満たされる場（学生）
- ・ 静かに思索しながら本を読むことの重要性（奥田東先生）
- ・ 静脩の場（院生）
- ・ 雰囲気 学生時代に利用した図書館には勉強に打ち込んだアカデミックな雰囲気だけただよっていた（湯川秀樹先生）
家で勉強するよりもその雰囲気にとけ込んで勉強の方が能率的である（教官）
- ・ 観念的クラブ活動の場であった。静けさと利用しやすさ、視野の機能分化（学生）

《接架》

- ・ 開架→設備がととのっている読書場（学生）
- ・ “本の間を歩きまわり” どんな本があるかを知り、どれを読むかを迷い、手にとって友達
の意見を聞くのはどんなに楽しんだらう（学

生）

- ・ 「本の顔をみる」ことの意義（野間光辰先生）

また、書庫の確保についても深刻で、「たまるばかり」（教官）といわれているが、保存書庫の建設が望まれるゆえんである。

「本との出会い」（学生）は、利用者と図書館との出会いでもあり、大きく育つよう大切に接したい。

3-3. 蔵書

最も意見の多かった項目であり、要約すると蔵書の充実に尽きてしまう。研究用としては「二次巨大情報館」^注（教官）、あるいは「IR、オンライン文献検索」（教官）といった一次資料に到達するための検索手段の充実と、「（従来からの見方である）物としての図書から情報としての図書」（教官）への捉え方の変換の必要性が指摘されている。学習図書館としては、開架図書の「複本制」（学生）「利用期間や冊数増」（学生）が要望されている。

また、「保存書庫」（教官）の建設と密接に関係し、「貴重書や史料化した資料の集中保存・管理」（教官他）の要請がある。

「資料の計画的収集」（教官）は緊要であり、特に「高額図書」（教官）や「統計資料のような特殊な資料は学内共同利用」（教官）が、はからなければならない。そして「日本文化を伝える文献を滅亡の危機」（小堀憲先生）から救い、「日本および世界の data bank」（教官）として、当図書館が成長することを期待されている。これらの事業は、学内にある大小様々な部局図書館（室）と中央図書館双方の充実があつてこそ達成されることである。

附属図書館は一回生から教官までの各層を、また人文・社会科学から自然科学までの全分野を対象としている。学問の加速度的な進展や拡がりに対応することは、並大抵のことではない。しかし大学図書館の目的や使命を心にとめ、サービス対象、サービス内容等の拡大・充実をはかり、学内諸階層の協力と理解を得て前進していきたいものである。

^注 完備された情報検索入手システムを指す。

近畿地区国公立大学図書館協議会略年表の刊行

さきに、「近畿地区国公立大学図書館協議会略年表」が刊行されました。

この協議会は、その名称どおり近畿2府4県に所在する国立・公立の大学図書館で組織されている団体で、「大学図書館の諸問題を研究しかつ協議する」ことを主たる目的に、毎年、各種の事業を行っています。昭和26年に第1回総会を開催し

て以来今日までの30年余に及ぶ活動は高く評価されているところです。

今回、50回総会を記念して刊行された略年表は、この半世紀の歩みを日時をおって日誌風にまとめられたものです。

なお、ご覧になりたい方は掛までお申し出下さい。

—図書館の TELEX〔5422693 LIBKYUJ〕をご利用下さい—

昨年10月より、附属図書館に全学共同利用のためのテレックスを設置しました。サービス開始以後、送・受信件数は、右の表に見られる通り、日を追って増加しています。利用方法については、『静脩』1982年10月号でお知らせしたとおりですが、くわしくは、閲覧課学術情報掛（内線2635）にお問い合わせ下さい。

年	月	受信数	送信数	合計
82	10	0	1	1
82	11	2	5	7
82	12	3	3	6
83	1	4	6	10
83	2	10	15	25
83	3	14	23	37
83	4	16	18	34
83	5	18	19	37
83	6	10	28	38
83	7	12	26	38
83	8	10	16	26
		99	160	259

昭和57年度附属図書館利用状況（部局別利用状況）

種別 所属別	閲覧数(冊数・人員)				貸出数 (冊数・人員)				合 計		利用比 %	
	和	洋	計	人 員	和	洋	計	人 員	冊 数	人 員	冊数	人員
教 養	7,707	45	7,752	4,479	5,962	29	5,991	4,289	13,743	8,768	14.4	17.6
法	10,716	18	10,734	6,016	2,822	3	2,825	2,164	13,559	8,180	14.2	16.4
経	1,152	31	1,183	698	1,269	5	1,274	898	2,457	1,596	2.6	3.2
文	6,329	116	6,445	3,092	4,160	25	4,185	2,680	10,630	5,772	11.2	11.6
教 育	851	9	860	455	602	6	608	425	1,468	880	1.5	1.8
工	4,162	17	4,179	2,502	4,867	8	4,875	3,770	9,054	6,272	9.5	12.6
理	5,952	17	5,969	2,506	4,543	13	4,556	3,428	10,525	5,934	11.0	11.9
農	622	2	624	343	644	5	649	430	1,273	773	1.3	1.6
医	469	5	474	261	394	3	397	281	871	542	0.9	1.1
薬	248	3	251	121	383	2	385	305	636	426	0.7	0.8
大学院	7,355	352	7,707	2,728	4,760	132	4,892	2,509	12,599	5,237	13.2	10.5
職 員	2,462	150	2,612	863	3,523	418	3,941	1,157	6,553	2,020	6.9	4.1
特 閲	6,266	298	6,564	1,426	—	—	—	—	6,564	1,426	6.9	2.9
研修員他	4,018	89	4,107	1,243	1,326	27	1,353	714	5,460	1,957	5.7	3.9
合 計	58,309	1,152	59,461	26,733	35,255	676	35,931	23,050	95,392	49,783	100	100

昭和57年度 蔵書統計

(昭和58年3月末現在)

部局別	種別	増加数			累計		
		和書冊	洋書冊	合計冊	和書冊	洋書冊	合計冊
図書館	書	6,379	3,255	9,634	389,240	156,079	545,319
文学部	学	6,287	5,583	11,870	389,924	240,707	630,631
教育学部	学	2,734	1,292	4,026	45,119	37,806	82,925
法学部	学	3,365	4,101	7,466	190,245	251,806	442,051
経済学部	学	3,804	3,695	7,499	161,202	165,479	326,681
理学部	学	704	3,489	4,193	35,919	177,286	213,205
医学部	学	1,049	1,646	2,695	33,349	86,120	119,469
病院		55	193	248	11,490	21,821	33,311
薬学部	学	118	338	456	7,884	17,085	24,969
工学部	学	4,742	7,809	12,551	116,844	212,382	329,226
農学部	学	2,562	2,755	5,317	149,329	132,334	281,663
農場		0	0	0	1,053	105	1,158
演習林		268	76	344	7,525	2,797	10,322
教養部		8,187	6,597	14,784	228,305	181,857	410,162
化学研究所		105	682	787	7,121	26,135	33,256
人文科学研究所		7,859	2,088	9,947	332,260	46,674	378,934
結核胸部疾患研究所		49	149	198	1,893	2,934	4,827
原子エネルギー研究所		121	580	701	3,928	9,094	13,022
木材研究所		100	150	250	4,457	4,482	8,939
食糧科学研究所		102	112	214	3,480	7,231	10,711
防災研究所		268	856	1,124	7,115	14,233	21,348
ウイルス研究所		12	580	592	328	6,938	7,266
経済研究所		1,220	1,415	2,635	27,269	19,619	46,888
基礎物理学研究所		153	612	765	3,015	23,116	26,131
数理解析研究所		253	2,681	2,934	4,329	52,971	57,300
原子炉実験所		245	268	513	12,481	20,693	33,174
霊長類研究所		179	457	636	2,374	5,493	7,867
東南アジア研究センター		1,164	2,286	3,450	9,240	22,497	31,737
大型計算機センター		45	399	444	517	3,530	4,047
ヘリオトン核融合研究センター		37	189	226	690	1,118	1,808
医療技術短期大学部		1,002	206	1,208	9,438	1,126	10,564
放射線生物研究センター		92	28	120	183	892	1,075
情報処理教育センター		3	8	11	218	276	494
本部		27	8	35	5,116	574	5,690
医用高分子研究センター		32	7	39	68	40	108
環境保全センター		24	3	27	207	5	212
超高層電波研究センター		1	22	23	432	1,755	2,187
合計		53,347	54,615	107,962	2,203,587	1,955,090	4,158,677

○ 本部：庶務・経理・施設・学生各部および保健診療所・保健管理センターを含む

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 20, No. 1 (通巻75号) 1983年10月1日発行・編集：静脩編集委員会（責任者 附属図書館事務部長）発行：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電 大代751-2111(内線)2611~2643